



「ひらほく新聞」で検索!

★感謝で継続11年目に突入★

http://www.hirahoku.com/

☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ!

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

明日を 笑顔に



800円+税
プレゼントに最適です

これまで何度かご紹介してきました、暗いニュースなどを一切載せない、『日本一心を揺るがす新聞』、『日本講演新聞(旧・みやぎ中央新聞)』。そこでコラムを担当するようになった、山本孝弘さんが、ついには15年程努めた会社を辞めて、この度これまでのコラムをまとめた初の書籍を出版。現在は講演家としても活躍、山本さんの新著『明日を笑顔に』をご紹介します。

引き寄せの縁

当「ひらほく新聞」は、2010年7月創刊で、当初は子ども向けの内容でスタート。その後2012年前半、「みやぎ中央新聞」と出会い、心よりリスペクト、当時たくさん出かけていた講演会等の話や、自己啓発や感動書籍を紹介するようになりました。

2015年には、「みやぎ中央新聞・神奈川読者会」に参加、松田くるみ会長、水谷謹人社長始め、素敵な読者の皆様とのご縁をいただきました。その頃から気になっていったのが、時折うなるようなコラムを魅せる山本孝弘中部特派員(当時)でした。そしてついに2年前の一昨年9月、名古屋出張の折りに夜、時間ができましたので、新幹線で豊橋へ。聖地の寿司店「登月」にて山本さんとご対面!登月の片山大将と3人で、まるで初対面ではないような濃厚なひとときを過ごしました。

その頃より、『魂の編集長』水谷さんの代打として、時に「社説」を受け持つようになった山本さん。あの浜松の夜語り合ったことをヒントに書いていただいた社説は、とても嬉しかったです。

この度の山本孝弘中部支局長の初出版に心より御祝い申し上げ、ホッコリあり、笑いあり、涙ありの36編のエッセイより2編をご紹介します。

靴脱げば 楽しい今日の 旅づかれ

亡き父は川柳を得意としていた。若い頃に地元紙に川柳を投稿し、何度も掲載されていたようだ。色褪せたその切り抜きが貼られたノートの子どもの頃に見たことがある。川柳が得意な若者ということだ、まだ二十代の父が写真付きで紹介された記事もあった。僕が小学生の頃のことだ。

学校から帰り、遊びに行こうとする僕を夜勤で寝ていた父が呼び止めた。「遊びに行くならこれをポストに出してきてくれ」と葉書を出してきてくれ」と葉書を出して渡された。それは市が募集する交通安全週間の標語募集に投稿する葉書だった。遊びに夢中になった僕は夕暮れになって帰る時にその葉書のことを思い出した。僕は慌ててポストがある駅前に行つてポケットの中でしたくちやになつてしまった葉書を投函した。

それから数日後、母と買い物に出かけた時、街なかで風船を配っている若い女の人がいた。風船をもらうとそこには交通安全標語最優秀作品という白い文字が書かれており、その隣に書かれていたのは僕がしわくちやにした父の標語だった。「そういう市から何か記念品が送られてきていたよ」と母があつたらかんと言ったのをよく覚えている。桜が散つた後の新緑の季節。いつも通り「おやすみ」と言つて寝た父は、朝にはもう冷たくなつていたそうだった。心筋梗塞による突然死だった。

父の眠る棺桶の中にその短冊形の色紙を花と一緒に手向けたが、僕は気に入った川柳が書かれた色紙を「形見」としてもらつことにした。

それが今も我が家の玄関に飾られている。玄関によく合うこんな川柳だ。
『靴脱げば 楽しい今日の旅づかれ』

「貧しい幼少期からいろいろ大変な人生だったけど、人生という靴を脱いでみると俺の人生も悪くなかつたよ」。そう言つて笑う父の姿が見える。僕にはこれが父の辞世の句ではないかと思えるのだ。

決して良い父子関係ではなかつたが、父の顔を思い出すといつもとてもいい顔をしている。最初は不思議だったが最近はそのにも慣れてきた。(おわり)

お弁当には 愛がある

「お弁当の日」というのがある。生徒に食の大切さを気づかせる食育活動の一環で、献立、買い出し、調理、弁当箱詰め、そのすべてを子どもだけでやらせる日である。実践校は全国に数千校もあるそうだ。確かに食育にお弁当はともいえると思う。お弁当には愛がある。

■お弁当の思い出 その1
高校時代、同じ部活動をしているWという友人がいた。彼は昼食に菓子パンを食べていることが多かった。昼に姿が見えなくなることもあった。ある日の昼休み、僕が何かの用事で部屋に行く鍵が開いており、中に入るとWがひざを折り曲げてぼおつと座っていた。Wは家が貧しく母親もいなかった。僕は毎日お弁当を食べられることが当たり前前だと思つていて自分の傲慢さに気づいた。

■お弁当の思い出 その2
僕が以前働いていた会社で、当時五十代後半のMさんが建設現場でお弁当を盗られた。現場では車を鍵を掛けないことが多かったので部外者が侵入してお弁当を盗むことが時々起こった。Mさんには悪いが、財布を盗まれるのと違い、お弁当を盗まれるというのはちょっと滑稽な感がある。Mさんもみんなと一緒に笑つていた。でも少し落ち込んでいた。でも少し落ち込んでいた。でも少し落ち込んでいた。

■お弁当の思い出 その3
これは妹の結婚式で読み上げられた両親への感謝の手紙の一部だ。「恥ずかしい話ですが、私は会社に持つていくお弁当をお母さんにつけてもらつていました。『マンネリでごめんね』といつもお母さんは言つたけど、お母さんのお弁当の味は一生忘れません」
妹の涙声に僕も思わず涙が出そうだった。母を見ると、意外にも毅然と立ち、じつと妹を見つめていた。その姿がなんだかっこよく見えた。
ちなみに母の隣にいた父は大泣きしていても恥ずかしくなかつた。(おわり)

映画「弁当の日」

2018年ご紹介の「全国まわしよみ新聞サミット」参加でのご縁、あの「はなちゃんのみそ汁」著者の安武信吾さんが総指揮・監督を務める、ドキュメンタリー映画『弁当の日』がこの度完成しました。自分の弁当を「おいしい」と感じ、「うれしい」と思つた人は、幸せな人生を送れる人。サブタイトルは『めんどくさい』は幸せへの近道。コロナ禍により、自主上映は来年4月からになるとのことです。

母の手作り弁当

母が作った 最後のお弁当

その日の朝、合宿の準備をしていた俺は、母から弁当を手渡された。しかし、あるところが焦りと母の弁当を持っていく恥ずかしさから、『いらねーよー!』と言ってしまった。

母の悲しい表情……。

結局、昼飯はコンビニで買った。しかし、今朝の母の悲しい顔が頭から離れないのもあって、全く美味しく感じなかった。

そのとき、俺の電話が鳴った。病院からだ。母が倒れたというのだ。俺はすぐさま合宿を抜け出し、母のいる病院へと向かった。しかし、病院に着いたときには、母はもう……。

家にはまだあの弁当が置いてあった。母の作った弁当は、今まで食べたどんな料理よりも美味しかった。母の味がした。母のあたたかさが伝わってきた。涙があふれ出した。俺はなぜあんなことを……。素直に弁当を持っていけばよかった。母に『おいしかった』と言いたかった。母のうれしそうな顔を見たかった。弁当箱の下には一枚のメモ用紙があり、そのメモ用紙にはこう書かれていた。『お母さんが心を込めて作ったお弁当だよ。おいしく食べてね。』(おわり)

いたら、日記が出てきた。中を見ると弁当のことは書き留めていた。

「手の震えが止まらず上手く卵が焼けない」

日記はあの日で終わっていた。後悔で涙がこぼれた。

(おわり)

ネット上での【泣ける話】

から、お弁当話題を二つご紹介しました。母親の子を思う愛は不変です。お弁当に込めた思い、思春期では難しくとも、自らが人の親となった時、あらためて実感することでしょう。

自分は子どもたちが中学校・高校だった頃、よく代打でお弁当を作りました。美味しかったといっただけはなかったかな(笑)。今となっては有難い良き思い出です。

てんしのいもごころ

新潟県柏崎市立

比角小学校一年 松橋一太

「僕には、てんしのいもごころがあります。」

夜中、僕はお父さんと病院の待合室に座っています。隣にいますお父さんは、少しこわい顔をしています。いつも一人でいっばいの病院は、夜中になるとこんなに静かなんだなあと思いました。

少し経ってから目の前のドアが開いて、車いすに乗ったお母さんと看護師さんが出てきました。僕が車いすを押すと、お母さんは悲しそうに、歯を食いしばった顔をして、僕の手をぎゅぐゅと握りました。家に着くころ、お空は少し明るくなっていました。

ました。

「また、お母さんのお腹に来てね。今度は産まれてきて、一緒にいろんなことをしようね。」と手紙を書きました。僕は、手を合わせながら、僕の当たり前の毎日、ありがとうの毎日なんだと思いました。

お父さんとお母さんがいることも、笑うことも、食べることや話すことも、全部ありがとうなんだと思いました。

それを教えてくれたのは、妹です。僕の妹、ありがとう。お父さん、お母さん、ありがとう。生きていくこと、ありがとう。

僕には、てんしのいもごころがあります。大事な、大事な、いもごころがあります。」(原文はすべてひらがなです)

こちらは、家族への感謝の気持ちをつづる2016年、第10回「いつもありがとう作文コンクール」(朝日学生新聞社主催、シナングループ共催)の最優秀賞作品です。

家族への感謝の思い、あらためてその大切さを教えてくれています。涙を誘うその感動溢れる内容に、4年経った今でもネット上で話題が続いています。◎ぜひ一太君ご本人の朗読動画をご覧下さい。

元気なうちに始める がんばらない終活

女性誌売り上げNo.1の生活実用情報誌「ハルメク」からご紹介。

「終活」と聞いて、どんなイメージ?まだ早い?縁起でもない?面倒くさそう?そんな方にこそオススメするのがハルメク流「がんばらない終活」です。詳細は雑誌にてどうぞ。

■終活3大要素

- ①入院・介護の備え
- ②死後手続きの備え
- ③家の片付け

■入院・介護と死後の手続きで、本当に必要なのは、たった5つ

- ①自分取扱説明書を作る
- ②資産を洗い出す
- ③入院・介護中に使うお金の準備をする
- ④最期の過ごし方を考える
- ⑤死後の手続きに必要な情報を整理する

■後悔しない終活アイデア

「ありがとう」の気持ちを伝えたい人を書き出し、おおく(連絡先・エピソード)将来飾ってもらいたい、お気に入りの写真を撮っておく(誕生日等毎年決まった日に撮るのもオススメ)現金化?手元に残す?手持ちのアクセサリーの市場価値を調べてみる

編集後記

「私もハダカになるから、お前もハダカになれよ!」8月末、SNSにて、ビツクリするようなメッセージ。2年前、敬愛する博多の歴史、白駒妃登美さんと著名な銀座のクラブママ、白坂亜紀さんのW講演会に参加した際に知り合った、女優・岩見理奈(歌手名:ジェミニ)さんからの映画作成の初のクラウドファンディングのお誘いだった。ずっと隠していた、12歳の時に母親が突然出ていって、以来胸の奥に閉じ込めていた思いを吐露。自らのすべてをさらけ出して、その壁をぶち破らなければ本当の自分になれない。

その彼女の本気の思いを直球で感じ、自らの過去のドキュメンタリー映画作成を微力ながら即支援。新潟・佐渡島の出身なので日本最大規模FB新潟県人会にも紹介。伸び悩むも、徐々に支援が進み、9月末には見事に目標額超えを達成。

今どきのSNSで連日の呼びかけ、そして何より、彼女の決して諦めない思いを応援する熱い同志、仲間が存在が大きかった。「あなたも一緒に、自分の壁を破って!」という強烈なメッセージが拡散していった。ドキュメンタリーの完成が待ち遠しい。

